令和４年度　第１回三条市包括ケア推進会議
生活支援・介護予防検討部会　会議録

１　日　時　令和４年９月 26 日（月）午後７時から８時 30 分まで
２　会　場　三条市役所　第二庁舎 301 会議室
３　出席状況
(1) 出席委員
坪井委員、渡辺(和)委員、横山委員、高頭委員、坂西委員、吉澤委員、佐藤委員、本間委員、小柳委員、石附委員、加藤委員、渡辺(淳)委員、野島委員、米山委員、田代委員
(2) 欠席委員
なし
(3) オブザーバー
指定通所リハビリテーション富永草野　南雲理学療法士
地域包括支援センター嵐南　佐藤センター長
セカンドライフ応援ステーション　石黒コーディネーター
(4) 生活支援コーディネーター
栗林コーディネーター(嵐北)、阿部コーディネーター(嵐南)、
松平コーディネーター(東)、　小越コーディネーター(栄)、
若桑コーディネーター(下田)
(5) 市関係部局
福祉課障がい支援係　鈴木係長
(6) 事務局
地域包括ケア総合推進センター　郷センター長、長田次長、渡邉主査、田口主任、鬼木主任、大倉一般任用主事
高齢介護課　村上課長、小林係長、本間主任、長谷川主事
４　議題
(1) 生活支援・介護予防における地域づくりの取組状況等について
資料１に基づき説明
(質疑)
横山委員　有償ボランティア活動について、ボランティアにとっては負担の大きい活動もあるとのことだが、具体的にどのようなことか。
また、さんちゃん健康体操について、体操指導員を廃止したら続

かなくなってしまったということであれば、検討してもいいのではないかと思うのだが、その辺がどうなのか。

事務局　まず、有償ボランティア活動での負担が大きい活動について、具体的には、力作業や少し身体的な負荷が掛かるもの、活動時間が長時間に及ぶものである。負担の大きい活動も依頼されることがあり、その都度、セカンドライフ応援ステーションでマッチングする際に、ボランティアとしてできることを切り出して依頼を受けたり、どうしても切り出しが難しいものについてはほかの団体を紹介したりといった対応をしている。

さんちゃん健康体操については、平成27年度に体操指導員を廃止し、体操そのものの指導はできないが、昨年度から配置された各圏域に生活支援コーディネーターが出前講座を紹介してサークルの内容を充実するなど、サークルの運営者の相談に乗っている。

しかし、体操の指導や体力測定は、コーディネーターはできないので、今後、リハビリテーション専門職の関与を検討したいと考えている。

横山委員　有償ボランティアについては、例えば、シルバー人材センターのように、「できること」と「できないこと」をパンフレットで示して事前に周知を図る方法もあると思う。

さんちゃん健康体操に関しては、集まらないとできないのではなく、覚えたものを家に帰ってやっていただくような流れを作ることによって広がっていくと思うので、そういった取組も必要ではないかと思う。

高頭委員　介護予防レクリエーションの出前講座のフォローとあるが、リハビリテーション専門職が出前講座をしているということか。

事務局　市職員とボランティアが一緒に集いの場に出向いて、レクリエーションを教えている。ボランティアだけが講師として行くにはやはり抵抗もあり、生活支援コーディネーターも地域の集いの場の把握などを行っているので、コーディネーターがレクリエーションを一緒に学び、一緒に出前講座で入っていければ良いと考えている。

高頭委員　さんちゃん健康体操などの集いの場では、軸になるサポーターや中心になって動くボランティアの育成がなかなか難しいというのが問題になっているという印象を受けたのだが、そういう方が育ちに

くい原因、理由みたいなものを、市で何か見当をつけていれば、教えていただきたい。

事務局　　ボランティアについては、養成講座という形で募集しているが、決まった人ばかりが受講しているということと、受講される方の中には、集いの場の支援のためではなく、自分の介護予防や健康のために受ける方も見受けられるということがあり、なかなか育成につながりにくい。

さんちゃん健康体操については、立上げのときは参加者でいろいろと役割を決めてやっていくが、新規の参加者が増えずに既存の参加者がどんどん高齢化し、最終的に役割を担えなくなり、そのままなくなってしまうという現状もある。なぜ地域の人が参加しないのかといった実態はつかんでいない。

高頭委員　　支援する方の介護予防に対する理解が必要ではないかと感じている。また、生活支援コーディネーターをお手伝いに動かしていくというのは一つ良いアイデアだと思う。そういう方々に啓発活動や、どのような手段であればやっていけるのかを、専門職が指導していくというのは、とても良いアイデアだと思っている。けっこう地道にやっていかないと広がらない活動だと思うので、大変だと思う。

石附部会長　　新型コロナウイルス感染症の影響もあって集いの場が減っているため、なかなか介護予防につながっていないということもある。生活支援コーディネーターは大変だろうが、頑張っていただきたい。

検討事項の一つ目、「介護予防に効果があることを伝え、高齢者を各取組につなげるためにはどのような啓発が必要か」ということについては、なかなか難しいが、これも生活支援コーディネーターが各圏域に出向いて活動していただくということだろう。

検討事項の二つ目、「介護、障がい等の事業所、社会福祉法人、他業種も含めた企業や団体等を巻き込むためには、どのような手段が効果的か」ということだが、ＮＰＯ地域たすけあいネットワークで、分野、世代を問わず、いろいろな方を対象に集いの場を行っていると思うが、効果的にやっていることなど意見があったらお聞かせいただきたい。

野島委員　　新型コロナウイルス感染症により、「ふらっとカフェ」はずっと休止したままである。ただ、地域の方々、会員の方々との交流はで

きるだけやめたくないということで、少しずつだが、デッキでのお茶会や、子ども食堂としてお弁当の配布、フラワーアレンジメントやオレンジカフェ、手仕事や針仕事などをやる「よりなせや」というグループの集まりなどを始めている。

しかし、助け合い事業としてやっている有償ボランティアの部分は、担い手が本当におらず、どうやったら入ってきてくれるのか、皆さんの意見を聞きたい。退職後の高齢までいかない元気な方はたくさんいると思うのだが、どうやったら入るか。うちは、研修や入会金などがあってハードルが高いが、それがなければ来てくれるのか。ボランティア講座というのはどういうものなのかお聞きしたい。

石黒オブザーバー　登録者が急増したときは、イベント、学びの情報目的で登録する方が多かった。その方々が今は80歳以上になり、ボランティアはしていない。現在は、実質的な登録者は1,000人程度で、その内の800人程度がボランティアを希望している。皆さん動ける高齢者で、80歳代の方でも自分のやりたいボランティアをやっており、こちらが簡単なボランティアを提案するが、本人は「もっと自分が役に立つものがやりたい」という方もいる。本人が何をしたいかを聞き取りながら、一人一人大事にマッチングしている。もし地域たすけあいネットワークの担い手に紹介してほしいということであれば、どのような形でボランティアとコラボレーションできるかを今後検討させていただけたらと思う。

私たちも登録者がどんどん活躍していただけるほうがありがたいと思っている。今日も広報を見て登録した方がおり、本当にボランティアをしたい元気な方がいる。マッチングで、皆さんのお役に立てるよう、私のほうに話をしていただければ、いろいろなものをつないでいきたいと思っているので、ぜひ協力させていただきたい。

野島委員　ぜひ、一緒にやらせていただきたい。

石附部会長　対象を問わない地域づくりに向けた圏域地域ケア会議には、私も参加しているが、特に嵐北圏域は、たすけあいネットワークや三条ベースなど、既に活動をしており、取組に協力いただけそうなところもたくさんあるので、地域の社会資源を生かしてネットワークを拡げながら、取り組んでいただければ良いと思う。

田代委員　さんちゃん健康体操について、何年くらい取り組んでいるか。

事務局　　平成21年度から開始した。

田代委員　　集いの場への新しい参加が少ないという話に関して、開始当初は、珍しいと思って参加されたのではないかと。それが10年経ち、人が固定されてしまうと、新しい人が入ろうしたときに、そのサークルの雰囲気が問題になっているのではないか。サークルは地域にあると思うのだが、話を聞くと、さんちゃん健康体操をやりたい人は、サークルではなく、大きい会場に参加しているようだ。要は、既存のサークルに新しく参加するというのは、壁があるのではないか。大きい会場の参加者は増えているのか。その会場も増えていないのか。

また、10年も経つと、機器、モニター等が古くなってきているのではないかと。モニターの交換やメンテナンスは誰がやるのか。無償で交換してくれるのか、あるいは、サークルの人が有償で替えなければならないのか。費用も手間も掛かるようだと、ちょっと遠慮しておこうという感じもあるのではないか。

開始当初は、体操指導員が数回参加してよく教えてくれたが、現在は、簡単だからモニターを見てやればできるということで、任せっきりとなり、新たな参加者は誰から教えてもらえるのか。

指導員などの先生が来て教えてくれると良いのではないか。

確かに、だんだん高齢化してきており、一人ずつ欠席されるとそのまま増えないでいるという状況が散見されるように、私もそう感じる。ＰＤＣＡサイクルを回してやれば、解決や方策が出てくるのではないかと思う。

事務局　　新規の参加者数は、正確な数字を持ち合わせておらず分からないが、確かに定期会場のほうが新規の方は来やすい雰囲気だと思う。サークルは、新規の方がなかなか増えていかないという状況ではある。

平成 21 年度の当初にできたサークルは機械も悪くなっていると思うが、サークルにはＤＶＤかビデオを貸与しており、在庫がある限りはそのＤＶＤ等の交換をしている。しかし、例えばテレビや機器そのものが壊れたというと、自治会の集会所等でやっている場合は、その自治会等の持ち出しで修理等していただくことになる。機器そのものが壊れたところまでは対応できていない。

体操の指導については、指導員がいたころには立上げのときだけではなく、サークルへの支援として年数回、体操の指導に行っていたのだが、指導員廃止後、新しい参加者はＤＶＤの映像を見ながら、他の参加者がやっているのを参考に一緒にやっていただくこととなっている。何回か繰り返しやれば、見ながらでもできるような簡単な体操だが、指導してもらえる機会があると良いと考え、今後の方針として、リハビリテーション専門職から一緒に何か関わっていただけないか検討していきたいと考えている。

(2) 介護予防・生活支援サービス事業の取組状況等について

資料２に基づき説明

（質疑）

横山委員　事業対象者の判定結果ごとの維持・改善割合の記載があるが、訪問サービス利用者か、通所サービス利用者か、全て合わせた対象者の結果か。

事務局　サービスの利用の有無関係なく、全て合わせた事業対象者全体の結果である。

横山委員　サービス提供事業所数が、通所型サービスＣ事業は２か所、訪問型サービスＣ事業は７か所しかなく、サービスの利用件数が減っている。

通所型サービスＣ事業について、そもそも数を増やすということは考えていないのか。

事務局　可能であれば、増やしていく方向を考えているところである。しかし、通所型サービスＣ事業は委託事業として、リハビリテーション専門職がいる介護事業所にお願いしており、従来相当の通所サービスと同時併用でサービス提供しているため、事業所の負担があるのではないかと考えている。

横山委員　負担の面も解決しないで拡大するのは、少し難しいということは分かった。

事務局　今年度は、通所型サービスＣ事業は２事業所で行うこととしているが、今年度から取り組む事業所では10月になってようやく受け入れられる状態になった。しかし、一度に何人もの利用者を受け入れることが難しく、受入先の課題がある。

石附部会長　　できれば利用者宅の近くで利用できるのが一番いいと思う。やはり２事業所だけではなく、いろいろな場所でできると良いと思う。

高頭委員　　サービスＣ事業は自立支援ができる人なのか、できない人なのかを振り分ける事業でもあると思っている。とても良くなる人は絶対に良くなるし、疾患によってそうではない形のサービスを選ばなければいけない人もいる。それをケアマネジャーが判断できるかと言われると、見立てが難しいので、ケアマネジメント支援訪問を始めた。その中で、地域包括支援センターやケアマネジャーの事業所はサービスＣ事業の理解ができているか、肌感覚としてどうか教えていただきたい。

もう一つ、悪化率が増えている点について、市民の普及啓発に関わってくると思うが、一般の方が「高齢者なので悪化は普通」というように捉えていると、よろしくない。改善しなければいけない率があり、もう少し上がるはず。市民が介護予防の理念を理解し、どのレベルの高齢者でも元気でいるためにはどうしたらいいのかという考えを持たないと、数字に反映してこないのではないかと思っている。サービスを受けたい高齢者は、「高齢なので仕方がない」という理解で来られてしまい、事業者もなかなかお断りできなかったり、ケアマネジャーもなかなか言えない部分もあったりすると思う。その辺り、理解度が進んだ感じがするか、感触でいいので伺いたい。

佐藤ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ　地域包括支援センターが総合相談で関わってサービスＣ事業につなぐパターンが一番多いと思うが、総合相談でもサービスＣ事業レベルではない方の相談が多く、介護サービスにつながる方が多い。改善する介護保険の自立支援という市民の観点について、サービスＣ事業自体も知らないし、自立していくということの市民への周知もなかなか浸透していないように感じている。窓口や地域包括支援センターを通じて周知に取り組んでおり、介護保険の理念や目的をきちんと先に説明したうえで、介護サービスは自立に向けてのサービスという話はするが、今まで根づいてきた「介護サービスを使いたい、できなくなったから助けてほしい」という方が多いように感じている。

佐藤委員　　ケアマネジャーは、地域包括支援センターから要支援・要介護の新しい方を紹介してもらうことが多い。ケアマネジャーが担当する

のは、サービスがある程度必要な方や、要支援か要介護か認定が微妙な方が多いので、認知症があったり、日常生活の中で何かしら理解力が低下していたり、転倒のリスクが高かったりで、早急にサービスを入れないと駄目なケースであることが多い。

その中で、昨年から、認定を受けるときに市などで自立支援について話していると聞いているが、ケアマネジャーが相談に行くと、「まずは今の困りごとを解決しないと駄目」というケースが非常に多い。ケアマネジャーでスクリーニングができているかというと、なかなかできていない。困りごとの解決にまずは寄ってしまっていると感じる。

また、家庭環境の変化もあると思う。11 年ほど前は、家族がいたり、親戚のマンパワーがあったりしたと思う。ここ 10 年、老夫婦二人や家族が離れており、家庭内のマンパワーがない。介護保険で解決していかなければならないところがあり、ケアマネジャーとして、要支援の担当でなかなかそういうことはしづらいと感じている。

あと、サービスＡ事業について、通所型Ａ事業は７か所だが、通所型Ａ事業を専門でやっているところは２か所である。私は、通所型Ａ事業単独のサービス利用者を２人担当しているが、２階でサービスを提供しているため「階段が上れなくなると利用できなくなる」と、階段の上り下りを頑張っており、３、４年経っても変わらず通っている。しかし、従来相当サービスと併用の通所型Ａ事業では、基本的に要介護者も一緒におり、状態が悪くなる方がいる。そうではない方もいるが、悪くなる方が多いと思う。お風呂などに入る必要がない方であれば、通所型Ａ事業でも良いと思うが、通所型Ａ事業専門の事業所が増えていかないと、選択の幅が狭いと感じる。訪問型Ａ事業については、なかなか利用してもらえない。このサービスをどう使っていくのか、ケアマネジャーも選択していくのか、市民への周知も含め、難しいと思う。

石附部会長　ケアマネジャーや地域包括支援センターが、自立支援や介護予防を言っても、市民に浸透していないと、家族や本人の意思を変えるのは難しいと思う。

米山委員にお聞きしたいが、検討事項について、市民の方から自立に向かう気持ちを持ってもらうため、介護保険の理念として自立

した生活といったことや、フレイル状態の改善という言葉が市民に浸透しているか。困ったときに介護保険ではなく、よくなるためにサービスを使うという意識が皆さんあるのかどうか。

米山委員　お年寄りが集まる場所は作らなければいけないと思っている。私が面倒を見ている85歳のおばあさんは元気で、１週間に１回、さんちゃん健康体操をやっており、友だちと話もしているし、週１回程度、買い物に連れて行っている。

また、冬の雪が降ったときなど何かがあればすぐに行き、面倒を見ている方もほかに１人いる。認知症が少し出ているかなという程度だが、元気。なぜかというと、やはり、人とのつながり、付き合いがあるからではないかと思う。

また、私の家は昔、ふれあいの場所みたいな家で、家族がくつろいでいる部屋に、「こんにちは」と高齢者たちが入ってきてお茶を飲むなど、誰でも入ってこられるような場所だった。年寄りが集まると、いろいろ話をして、フレイルも改善していくのではないかと思う。その場所を作ることが一番大事なのではないかと思っている。

100ｍ、200ｍの間に一つ作らないと、なかなか人は集まらないし、高齢者は特に家に閉じこもってしまう。それを何とか外に連れ出して、集まって話をしたり体操したりすることで、認知症の発症・進行も遅くなるのではないかと思っている。いろいろ話を聞くのだが、なかなかその場所がないのが実態である。集会所があるところは少ない。私の地区は、老人会が主体で動いているが、近年、老人会に入会する人もいなくなっている。

昔、さんちゃん健康体操など、はじめは皆さん張り切って参加された方が多いが、段々年を取って参加できなくなる。参加者がとても少なくなり、新たに入る人がほとんどいない。老人会への入会も少ないという状態になっている。老人会は年会費が必要である。60歳以上が入会可能だが、募集しても私はまだ早いという状態で、なかなか参加する人が少なくなってきている。何とか老人会やグループ、サークルに引っ張り込めたらなと思っている。

空き家がどんどん増えている。その空き家をうまく利用し、そこに集える場、茶飲みの場などの誰でも入れるような場所を作れれば良い。整備する費用は市の負担とし、空き家の所有者の権利関係も

あって簡単にはできないかもしれないが、そういうものを作り、その場所に高齢者が集まってくれるようにしたら良いのではないかと思う。

石附部会長　　新型コロナウイルス感染症の関係で集まる場所を廃止したという話も聞くが、集いの場はとても大事だと思う。情報交換の場にもなり、介護予防の意識も高まるのではないかと思うので、また進めていただければと思う。

4　その他

次回の開催について、来年１月に予定していることを事務局から説明

5　閉会あいさつ

郷センター長

（午後８時 30 分閉会）